

Das 18. interuniversitaere Juniorenseminar
für deutsche und japanische Kultur
第18回 ドイツ語ドイツ文化ゼミナール

2000

下のプログラムにより、大学生（一年生から四年生までを主としますが、人数に余裕があれば大学院生も可）を対象に、ドイツ語の訓練を主目的として、4泊5日の合宿ゼミナールを開催いたします。

今回のテーマは、簡潔きわまりない「2000」です。これをどう読むかが問題ですが、まずは2000年と解釈する人がほとんどでしょう。2000年と読んだところで、2000年はまだ来ていません。もちろん2000年になってからその話をしてもあまり面白くありません。1999年にそれを話題にするから話が弾むのです。つまり未来学を始めることとなります。21世紀に我々を待ち受けているのは何か、それに我々はどう対処したらよいか等々。一方2000年までのことを考えたら、一つは世紀末というイメージが沸いてきます。もっとも世紀末は今まで19回はあったはずですから、過去の世紀末の現象との比較も面白いでしょう。しかし2000年は単なる21世紀の扉ではありません。Das dritte Jahrtausendへの入り口でもあります。となるともっと大きな目でこれを見る必要があるでしょう。しかし、そもそも何でここに区切り目を見ようというのでしょうか。西暦だけの話です。西暦を使わない限り、大騒ぎをする必要もありません。イスラムの世界では何の意味もないでしょう。でも、イスラム歴2000年が来ればたぶん大騒ぎになるでしょう。そうした区切りを見つけ、そこに何か意味付けをすることは、人間の心理として普通のことなのでしょう。でもなかにはこれを単なる数字として見る人もいます。そういう人とはドイツ語の数の練習でも徹底的にしましょうか。結構大変ですよ。数は普通の授業ではそれほど練習の対象にはなりません。が、実生活では非常に重要なことは、一寸日本での身の回りの世界を見てみればすぐ分かるでしょう。日本とドイツでの数の持つ意味の差についても考えることが出来ますよね。

いろいろなテーマの扱いかたはありますが、ゼミナールでは、テーマを絞ることは特に考えず、広くこのテーマに関連したところでドイツ語で考え、話し合い、あるいは読み書きする能力の訓練を第一の目的したいと思います。今回もこのテーマでスピーチコンテストなどして見ようかと考えています。

またこのゼミナールには、滞日中のドイツ語圏の学生を3、4名招待する予定です。このドイツの友達と習い覚えたばかりの表現を使って、ゼミナールのテーマについてディスカッションするのも、また彼らが一般に何をどう考えているか、また私たちはどうか、率直に話し合うのもよいと思います。講師の先生たちも皆さんと話し合うのを楽しみにしていますし、場合によっては、通訳も買って出ようと待機しているのです。

いろいろな大学からの参加を期待しています。

1998年12月

Interuniversitaeres Juniorenseminar 実行委員会

境 一三、柿沼 義孝、吉島 茂

協力 Deutscher Akademischer Austauschdienst

Goethe-Institut Tokyo

記

日時：1999年3月14日（日）～18日（木）

場所：獨協大学新甲子研修所（福島県西白河郡）

費用：30,000円（宿泊代、テキスト代、通信費を含む。バス利用者は往復代金1,500円プラス）

申込：2月8日締切

募集人数：90名程度（申し込み順）